

## オホーツク海南西部における後期完新世表層・中深層水変動 - 北見大和堆東側斜面から採取されたコア GH00-1006 の解析結果から -

### Late Holocene surface and deep water change in the southwestern Okhotsk Sea

# 板木 拓也[1], 池原 研[2], 小森 次郎[3], 嶋田 智恵子[4]

# takuya itaki[1], Ken Ikehara[2], Jiro Komori[3], Chieko Shimada[4]

[1] 産総研, [2] 産総研・海洋資源環境, [3] 都立大, 地理, 院, [4] 国立科博

[1] AIST, [2] MRE, AIST, [3] Graduate course of Geography, Tokyo Metropolitan Univ., [4] Dept. of Geology, National Science Museum

オホーツク海南西部から採取された5本のコア中のバルク有機物の放射性炭素年代値は東サハリン海流水に属する場所から採取された沖合のコアでは、沿岸よりの宗谷暖流水に属する場所から採取されたコアの年代値よりも明らかに古い年代を示す。これは、沖合の水塊がオホーツク海北西部から古い有機物を運んでいることを示唆している。北見大和堆東側斜面から採取されたコア GH00-1006 には、コアの中部に葉理の発達した部分が認められる。この葉理の発達した部分では、硫黄含有量が多いほか、アルミニウム、鉄、カリウムなどの含有量も高くなる。また、バルク有機物の放射性炭素年代値は葉理の発達した部分では、葉理のない部分に比べて明らかに古い年代値を示す。一方珪藻化石では、葉理の発達した部分からは宗谷暖流指標種が認められない。このことは、葉理の発達した部分とそうでない部分で堆積物粒子の起源が異なっており、宗谷暖流の弱化に伴って、沖合の水塊が沿岸まで広がったことを示している。さらに、葉理の発達と高い硫黄含有量は底層水の低い溶存酸素量を示唆している。これは、中層水循環が変化して、溶存酸素量の低い中暖水の影響域がこのときには水深の浅い部分まで拡大した可能性を示唆する。このような変化はおよそ1000-2000年前に生じており、いわゆる“古墳寒冷期”に対応する可能性が高い。